

Verus String Quartet ウェールズ弦楽四重奏団リモートインタビュー

完全版

ついにファイナル!

「ベートーヴェン弦楽四重奏曲全曲演奏会

コンサートホールでの音楽会は、4月7日の緊急事態宣言で不要不急の外出自粛要請以降、開催予定のコンサートは中止や延期となっています。

このような状況の中、ベートーヴェン生誕250年に向け、ベートーヴェンが作曲した弦楽四重奏曲全16曲を5年間で演奏するプロジェクトの奏者であるウェールズ弦楽四重奏団のみなさんにリモートでインタビューを行いました。

インタビュー日:5月23日(土)

2017.01.18 公演



第1幕

司会:どのように過ごされていますか?

富岡:今年演奏するベートーヴェンの弦楽四重奏曲は6曲あるんだけど、この6曲ってめちゃ大変なんです。

不謹慎だけど、外出自粛で唯一

良かったのは、すでに時間をかけてさらう(※1)ことができたことですね。

それまではオーケストラの演奏会(※2)などで時間の余裕がなかったのですごく心配してたから、良かった!このメンバーでこの6曲を演奏するの初めてなんです。

司会:「このコロナ禍でベートーヴェンをさらった」はキーワードですか?笑

横溝:おれ、ぜんぜんさらってない!

全員:爆笑。

富岡:耕ちゃん(横溝)は時間が取れないよね。(小さな娘さんがいて、自室にいても5分に1回は覗きに来るので、今日のインタビューも自家用車からでした)

横溝: そうだけど、今までよりも格段に楽器に触る時間はあるよ。だけど、カルテットの曲は全然弾いてない。

逆に、バルトークのヴィオラ協奏曲(※3)は弾けるようになった!

全員: えー!すごい!!!

横溝: 人前で弾くのはまだ早いけど、レッスンは受けられるまでの状態にはなったね。ついにソロのレパートリーができたんだよね。今回のコロナ禍の外出自粛制限中に自分に課題を設けて、三大B、バッハでなくてバルトーク、ベートーヴェン、ブラームスの協奏曲を毎日勉強してるんだけど、バルトークはヴァイオリンでなくてヴィオラをやったのね(※4)。だから、カルテットの曲は全く弾いてない!

富岡: おれも、30曲くらい、ありとあらゆる曲を譜読みしてる。1/3は協奏曲かな。今のところそれらを披露する機会はないから、一生、聴いてもらうこともないかも。終息が見えないから、いずれ演奏する曲というのが予測つかなくなった。

崎谷: おれも、今は今後これ弾きたいなっていうラヴェルのツィガーヌとか選んで、弾いてる。この状況では、自分が弾きたい曲しかさらえないよね。

三原: ぼくは、カルテットさらってますね。ほかにさらう曲がなくて。オーケストラ(東京都交響楽団)もいつから始まるかわかんないし。

富岡: さらうってというか、勉強してるんでしょ?(※5)

三原: まあ、勉強含めてスコア(※6)見ながらさらってますね。まあ、それも何さらっていいかわかんないからやってる感じですね。

崎谷: 目的失った時ってなにやっていいかわかんないよね。

富岡: うん。今度演奏する6曲はほとんど初めて演奏する曲だしね。耕ちゃんはほかの人と演奏したことあるでしょ? おれ、ほんと初めてなのよ。

司会: 今回、2回の演奏会で演奏する6曲は、ウェールズ弦楽四重奏団としては初めてとのことですが、これらの曲目を第5幕、第6幕に持ってきたのはなぜですか?

三原：毎回テーマを設けて曲目を選んでいました。これまでも初期・中期・後期（※7）とバランス良く組み合わせてきたので、今回もそれを意識しました。

第5幕は、必然的に第14番が残ったんです。曲のテーマや要素に特別なことはないんですけど、7楽章まであり、しかもすべてアタッカ（※8）で、45分の大曲なんです。それだけで強烈でしょ。前半の第1番と第11番はそれぞれへ長調とへ短調の曲で、同じ「ファ」の長調と短調であることに加えて、弦楽四重奏曲全16曲の中でも両曲ともテーマが明らかにユニゾン（※9）で始まるというのがあって、それでこの組み合わせにしました。

第6幕は全16曲中演奏していない曲になる訳ですけど、実は逆で、まずこの3曲が決まっていた。第4番と第10番は調性がハ短調と変ホ長調で平行調（※10）なんです。しかも両曲ともロプコヴィッツ侯爵のために書いたという共通項があります。第7番「ラズモフスキー第1番」というのは、ベートーヴェンの弦楽四重奏曲の中でも有名だし、一番バランスが良い曲と思います。このラズモフスキー伯爵は、ロシア大使で、ロプコヴィッツ侯爵と並ぶベートーヴェンにとって重要なパトロンでした。交響曲の第5番「運命」、第6番「田園」も同時代に作曲されていて、この2曲は、ロプコヴィッツ伯爵、ラズモフスキー侯爵に贈っているんです。第4番と「ラズモフスキー第1番」は、それぞれ「運命」と「田園」と同じ調性で作曲されています。だから代表作が作曲された時期の作品をもってきたいという思いがありました。

司会：みなさん、わかりましたか？笑（※11）

横溝：当日の曲目解説を改めて読みたいと思います（笑）。

司会：さて、学生時代から大分にいらっしゃるメンバーもいるし、カルテットとしては2014年、そして2017年以降、毎年大分に来ることとなり、これまでの思い出や印象を教えてください。

横溝：ホールが広いので、舞台から見て聴衆の表情はわかりづらいけど、前回演奏した「大フーガ」なんて、じっと聴くには長いし、退屈してもおかしくないのに集中して聴いてくれるのはよくわかったよね。サイン会に並んでくれる人が思ったより多かったりするの嬉しいね。シャイな印象で、決して熱狂するタイプではないけど、惜しみない拍手をくれるよね。少しずつだけど認知度が上がって、受け入れてもらってるよね。

崎谷：東京だと毎日たくさんの場所でコンサートがあるのが当たり前ですね。オーケストラ、海外アーティストなど公演数もたくさん。そういう意味で大分は素直に音楽を求めてくれるよね。自分たちの演奏するベートーヴェンの弦楽四重奏曲も、全曲なんて初めて聴く人も多くなって聞いてるし。過去の名盤とか〇〇弦楽四重奏団とかと比べたり、「ウェールズ SQ の演奏は・・・」と評論したがる人がいないから、すごくフラットに、ピュアに聴いてくれるのが嬉しいし、演奏しやすい場所ですね。



富岡：前回、「大フーガ」を演奏した時のアンケートを鵜呑みにしてるんだけど、この曲は耕ちゃんが言ったように、難解な曲で聴きやすいとは思えないんですね。でもそれが「大フーガが聴きごたえがあった」って書いてくれてて、自分たちだけが、良い曲と思ってるんじゃないくて、その想いを込めて演奏してるんですね。初めて聴く人にもちゃんと曲の印象が伝わるように演奏したいっていうのが、ウェールズ SQ のモットーです。子どもの中にも「大フーガが良かった」っていうのが多くて、調子に乗っています（笑）。初めて聴く人にも、何度も聴いている人にも満足してもらう演奏というのは実は同じことで、それができたんだらうなって実感できたのがうれしかった。お客さんの反応は自分たちにとってすごく大事ですね。

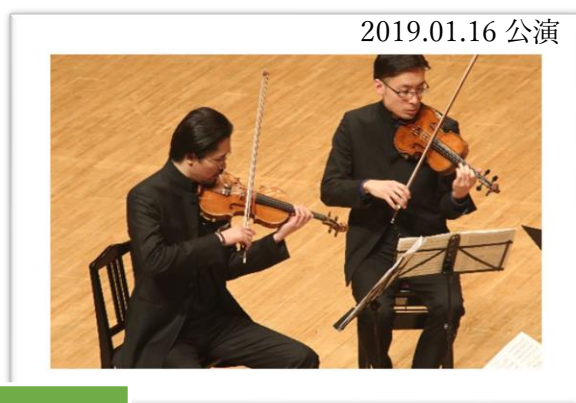
司会：お客さんの反応はステージ上からでもわかりますか？

横溝：自分たちの演奏って、比較的どちらかというとりラックスして聴けないんだと思うんです。割と緊張強いよね。ピアノッシモの作り方とかね。楽章の終わりで、お客さんがそれまで息を止めて、ようやく呼吸したんだらうっていうのがよくわかる。それは空気感でわかるよね。自分たちにすると「狙い通り音が運べてる」「演奏が良かったんだな」と感じてます。

富岡：音だけじゃなくて、空気感も演出の要素。空気も表現の演出方法。それをこちらが作って、狙い通りになっているということはよくわかりますね。会話するときと同じで相手を見て話す時に、すでに伝わっていることは端折ったり、疑問を感じているだらうって時は丁寧に説明したりするでしょ。自分たちの音楽もそれと同じで、聴衆に一方的に話しかける、ではなく、対話をしていると思っています。答えは

1つだけ、どういうアプローチで答えを出すか。お客さんによって異なる空気感や空間の演出方法を意識していますね。それがライブの醍醐味ですよ。

横溝: 楽しみって意味では、やっぱり「食」ですよ。行きつけの居酒屋がなくなったのは残念だけど、そこの大将がコンサートに来てくれたり、差し入れしてくださったのは嬉しかったよね。まだ、ウェールズ SQ でふぐは食べてないけど。東京で演奏会があっても、だいたいみんな家に帰っちゃうけど、大分だとみんなで食事に行って、そこで音楽の話もそうだけど、それぞれのオーケストラの話とか、プライベートの話もするよね。前は、温泉にも一緒に行ったよね。



第3幕

司会: 今、コロナ禍において演奏はもちろん、外出もできない状況だけど、何か変わりましたか？

崎谷: いろんなジャンルの人の演奏をインターネットで聴いています。自分たちはまず最初に「不要不急」なものだ

と言われたんです。それまでは、自分たちに演奏会があること、人前で演奏してお金をいただくことは当たり前だと思っていた。

命に関わる時には、自分たちは要らないものとして扱われた。じゃあ、何のためにやるのか？演奏する意味は何なのか？何を求められているのか？オーケストラの存続が危ぶまれていて、「寄付をお願いします」という以上、何ができるのか、を考えるよね。今回、マスクのためなら1万円払う人がいたよね。命がかかると人はそれだけお金を払う。俺らも「音楽家は必要だ」と思ってもらえるアクションを取らないといけないんじゃないか。それを強く思ってます。自分たちはそれぞれ違うオーケストラで活動して、こうしてカルテットもして、この人たちの演奏だったら足を運びたいと思ってもらう方法を考えないといけない。「いらない」と言われちゃう。

ウェールズ SQ がこれからどうやってその答えを出していくかは課題ですね。

横溝: こないだ、テレビでイツァーク・パールマンのドキュメンタリ番組があったのね。

オバマ大統領が「彼の演奏は曲の魂をむき出しにして、超越的な存在を感じさせ、そして世界を少しだけ明るくする」と言葉を贈ったんだよね。まさに、これを言わせることが音楽家の最高峰だと思った。音楽家が人の命を救う、ということもあるかもしれないけど、「自分は人の命を救った」という音楽家はいないし、い

たとしたらそれはとんでもない勘違いだし。日本におけるクラシック音楽業界ってたかだか100年くらいでしょ。クラシック音楽は聴くことも演奏することもステータスになってしまった。「価値の押し付け」になってないか？でも我々ができることは「聴く人ひとりひとりの人生、世界を少しだけ美しくする努力」を音楽家自身が、各団体が突き詰めていく。そこに立ち返るチャンスをコロナ禍は与えてくれたのかもしれない。

子どもたちが「大フーガ」が一番よかったって言ってくれたように、今まで見たことのない世界観とかベートーヴェンのイメージが変わって、一つでも情報が上書きされて、その人の人生で少し美しいことだなということを思ってくれば、我々の価値を認めてくれたかなと思ってる。それは我々がこれまであまり失わずにやってきた自負があるし、これからもっと求められるよね。

オーケストラもカルテットも、単にブランドやネームバリューで人が求められるのではなくて、個人の価値観が認められる時代になってるよね。

崎谷：今までは「いい演奏をしよう」と思っていた。自分たちの理想を形にする、残すって思ってた。それって、自分のクオリティーや音への執着が強かったんだと思う。今、このコロナ禍で一発撮りして Youtube(※12)に公開してるのね。それって、前だったら絶対してない。それと久しぶりにCD買って。五嶋みどりさんのバッハなんだけど欲がないのがわかる。上手く弾こう、いい演奏にしよう、何を残そう、なんていう次元で音楽をとらえてないのね。それ聴いて、自分がまたヴァイオリンを弾く気持ちになったんだよね。

声高らかに「文化だ!」「芸術だ!」
なんて絶対言わない。自分のしている行為そのものが芸術だし文化だしアートだから。自分たちもそのレベルになりたいけど、叶わない気持ちもある。自分たちはちゃんとそのバランスをうまく取って、聴衆に届ける方法を考えていかないと。

オケだろうがカルテットだろうが、傲慢と思われるよね。全世界に向けて、とか歴史的に自分たちの演奏がどうであることを示すでなく、聴いている人が、俺にとっての“五嶋みどりのバッハ”のように、価値のあるものと思ってくれたらいい。

だからこれからは弾く目的が変わるかもしれない。

第3幕



2019.01.16 公演

司会：今、崎谷さんは SNS 等で発信をしていますよね。

崎谷：これができるプレイヤーが生き残っていく時代と思うから、自分は発進してるんだよね。(自分の所属する)神奈川フィルハーモニー管弦楽団は、運営資金がほかの団体と違う。1、2か月コンサートがなかったら、消滅するかもしれないってこともあったけど。寄付をお願いしますって言っても、じゃあこのコロナ禍であなたたち何をしていましたか?って問われたときに証明するものがないでしょ。各オケや団体が、自分たちはこうしています、っていうことを示すべき。

でないと認められないよね。こうして示すことで、選ばれる人にならないといけない。これから先、密を避けるために小編成で音楽会は再開されるから、ウェールズ SQ はそういうことを踏まえてやっていかないといけない世代。でないと、下の世代が続かないよね。「またクラシック音楽でしょ。芸術家っていうんでしょ」って言っちゃうと、音楽家になる人いなくなるしね。それが嫌でめっちゃ売れてるのが King Gnu だしね(笑)。

すごいけどクラシック音楽やりたい下の世代の受け皿をこれまでとは違うやり方で作る必要があるって思っています。

横溝：カルテットの中でも、自分たちは中堅になりつつある。もう若手じゃないのよね。



コロナ以降、様変わりする音楽界、カルテット界を、我々ができることは何だろうって4人で一生懸命考えていて、我々のためだけでなく、後輩たちのためにやっていく必要があるよね。

司会：今、一番したいことは何ですか？

崎谷：ここじゃ言えません。

全員：大爆笑。

三原：マスクなしで運動したい。水泳に行きたいけど閉まってるし、きついよね。

横溝：普通に、まさにこのリモートインタビューじゃないけど、人と会って、話をしてご飯を食べに行きたいよね。当たり前だったことをしたいよね。計画立てて旅行したりさ。外出自粛の前は、仕事して疲れた、疲れたって思ってたけど、そのことも愛おしい

と思うよね。基本、テレビっ子なのに、テレビも飽きた。Youtube 見てると、娘にとられちゃうし(笑)。

富岡:実はそんなにないのよ。3月のうちは、外に出たい、ご飯食べたい、演奏したい、呑みに行きたいとかあったけど、4月くらいから長引きそうと思って、もう家に居たい環境つくったのね。今はいつ起きても寝ても関係ないから、日付という概念を取っ払って生活してる。

全員:大爆笑。

富岡:起きたい時に起きて、弾きたい時に弾いて、食べたい時に食べる。1日3食ももう取っ払った。今までは、明日演奏会があるからさう、とかだったけど、今は興味がある曲と向き合ったりしてる。そうじゃないと続かないよね。

司会:みなさん、髪が伸びてるみたいだけど、散髪は?

全員:あ、散髪したいね。

富岡:あ、あったね。散髪したい。でもまあ通販でバリカン買ったら家でもできるよね。

崎谷:お前はな(笑)。

富岡:(髪伸びたから)シャンプーの消費量がすごい。

横溝:水道代が高いわ。ずっと家にいると食器洗いとか、手洗いとか。

富岡:外食費は抑えられるよね。

横溝:たまにUber(※13)しちゃうよね。

富岡:最近始まったお持ち帰りとか利用し始めたね。いろんなお店がやってくださってるよね。それで、初めて利用したお店もある。外出自粛制限が解除されたら新たに行きたいお店が増えたよね。

崎谷:それは、飲食店を支援するためにやらないといけないよね。
おれ、今回初めてクラウドファンディングで寄付したんだよね。

Twitterで知り合った人だけど、ウェディング事業で起業してて。でも引き出物が余って、給付金でそれを医療従事者の人に届けてる。フードロスと医療従事者への支援。

自分ができるとの最善のことを、自分で見つけてやってることから、刺激を受けてる。自分たちも、音楽家も考えないと。

横溝:自分たちに縁がある地域で支援したいね。俺だと宮崎とか、もちろん大分も。我々4人が手を組んで、支援できることあるかなって思う。

司会:次のコンサートの予定は決まっていますか？

横溝:予定どおりだと8月の宮崎国際音楽祭(これはインタビュー後の5月27日に中止が決定)

富岡:読売日本交響楽団は7月かな。

三原:東京都交響楽団は7月後半だけど、都の意向次第かな。もしかしたらもう少し長引くかもね。

崎谷:6月上旬に、横浜市からのオファーで、ドビュッシーのソナタを無観客の大ホールでドローン撮影して配信ってのがある。

富岡:おれ、それ見るわ。

崎谷:あとやっぱりアーティスト支援で6月30日に NAOTO(※14)さんたちとライブ配信する。ダブル・ナオト(笑)。

インタビューは盛り上がり1時間半にも及びました。ウェールズSQならではの音や空気分などぜひお楽しみください。みなさまのご来場、お待ちしております!

- ※1 さらうは、「復習う」と漢字では表記をし、音楽業界では、繰り返し練習をしてほぼ間違えずに演奏することを意味します。
- ※2 ウェールズ弦楽四重奏団のメンバーは、それぞれ別々のオーケストラに所属しています。
- ※3 協奏曲を演奏できるということは、ソリストであるということです。ソリストは限られた人しかありません。
- ※4 横溝さんは、所属する NHK 交響楽団ではファーストヴァイオリンの次席奏者で、ウェールズ弦楽四重奏団ではヴィオラを演奏しています。
- ※5 三原さんは、他のメンバー曰く「ウェールズ弦楽四重奏団の頭脳」。カルテットでの曲目選定は三原さんが一任し、みなそれに従っています。
- ※6 自分以外のパートも記載されているもの。
- ※7 ベートーヴェンの作曲は、初期・中期・後期と分けられていて、それぞれに特徴づけられています。
- ※8 楽章の境目を切れ目なく演奏すること。
- ※9 同じ音符、旋律を演奏すること。オクターブ含む。
- ※10 同じ調合を持つ長調と短調のこと。例えば、変ホ長調とハ短調など。
- ※11 曲目はすべて三原さんが決めていて、その内容についてはみな、知る由がない(笑)。
- ※12 無料で利用できる動画共有の代表的サイトのこと。
- ※13 Uber Eats のこと。お店の料理を配達員が宅配するフードデリバリーサービスのこと。
- ※14 クラシックからポップスなど既存のジャンルに縛られずに表現する唯一無二のヴァイオリニスト。